

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	吉本隆明の宗教観
Author(s)	ガニエツ ヨアンナ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1998 : 41 - 53
Issue Date	1999-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039389
Right	
Relation	



吉本隆明の宗教観

ガニエッツ・ヨアンナ

1. 日本仏教の<浄土>と<善悪>について

吉本が仏教について関心をもつようになったきっかけは信仰そのものではない。吉本の回想によれば吉本自身には信仰もないし、吉本の両親もそれほど熱心な信者ではなかったが、祖父母は熱心な信者だったので、吉本には仏教の素養はあったかもしれない。そして、戦争中の教養の中には仏教的なものが学生の間でひとつの流行としてあった。その当時、吉本はよく「歎異抄」を読んでいて生々しい言葉と逆説的な言葉に感銘を受けた。戦後には、戦争中の思想的、文学的な風潮が、一夜で民主主義に変わっていくというような傾向に対する一種の反発とそんなに簡単に変わりうるものかという懐疑があった。戦争中に培った古典や仏教の教養を自分なりに確かめてみたいという思いが吉本にはあった。そんな気持ちの中で、学生だった吉本は「歎異抄に就いて」という文章を書いている。日本の歴史上の思想家としての親鸞が気になっていたから、いつか親鸞をもっと論じたいと吉本はずっと考えていた。いつかはと思いながら他の問題に関わっていると、対象としての親鸞は遠ざかるばかりである。そして「書物の解体学」を書く準備をしている時に新約聖書の思想を研究することになったが、そこには親鸞の思想と似た考え方があり、改めて触発されるみたいなことがあったので、この機会に、親鸞を真正面からやってみようと吉本は思った。親鸞に対して関心をもち続けていたのは、親鸞を信仰の教祖と考えたからではなく思想家として高く評価していたからである。

親鸞は絶対他力の思想を根底においており日本では珍しいタイプの思想家だったと思われる。仏教の様々な言葉をできるだけ使わないで自分の言葉で表現したということで吉本は日本の思想家の中で親鸞が一番優れていると評価している。<浄土>ということに対して親鸞は独特の言い方をしている。

浄土宗の始祖である法然を例にとると、法然が考えた<浄土>というのは、どういう水準に想定されているのだろうか。法然はまっすぐに真正面から、人間が年をとって、病気になったりして死ぬと、その後に浄土があるというふうと考えていたと思われる。つまり、浄土というのは実体として存在する、と考えている。死んだ後に浄土に往けるかどうか、浄土に往けないで、また現世へ戻って来て、色々な虫とか、人間ではないものに生まれ変

わったり、人間に生まれたりというふうには輪廻を繰り返すか、あるいは浄土に往って、浄土の人となりうるかということは、法然が一番真正直に考えている。

法然にとっては、「浄土のレベル」は確かにあった。それは実体としてあり、死んだらそこへ往くというふうには考えている。どうやったら往けるかという、阿弥陀仏の名号を心の底から称えることによってそこへ往けるというのが、簡単に言えば法然の開いた浄土宗の本旨、つまり宗旨であると吉本は思っている。

それが阿弥陀仏の四十八願といわれているものの中の十八願にあたるわけだが、これは、至心に信じて名号を称える者は、一遍ないし十遍称えても浄土へ往けるということだ。死んだ後にそういう国が実際にあって、魂がそこに往けて、そこは浄福な、清浄な国で、苦しみなどは何もないところだ、と文字どおりそういうふうには法然は考えていた。それが法然の抱いた<浄土>に対するイメージだ。確実にあって、信仰が至心で、誠実である限り、死後確実にそこへ往けるということだ。

法然の、例えば「往生浄土用心」(消息文)の中に、病気が重くなった人の寝ている部屋の西側の壁に、阿弥陀仏の画像を掛けておいて、そして病人を西向きに寝かせて、そばに浄土の善知識が控えていて、その善知識が名号を称える、それと一緒に病人も名号を称える、そうすれば浄土に往生できる、だからそうしなさいと言っているところがある。そうしなさい、と言っているということは、浄土が実体としてある、そして死後確実にそこに往くというように考えていたことを意味すると思う。

ところで、法然の弟子であり、また別に浄土真宗という一宗を開いた親鸞は<浄土>をどのように考えていたのだろうか。親鸞は「浄土の水準」を、法然のようには考えなかった。つまり、実体としてあるとは考えなかったということだ。親鸞は法然の弟子だから、十八願を、つまり至心に阿弥陀仏を信じて名号を称えれば必ず浄土へ往けるという浄土宗の理念は、そのとおり護っているわけだが、親鸞の言い方は少し違うのである。

このことは親鸞の弟子筋には当時から問題になっていて、名号を称えた時に浄土へ往けるのか、それとも死んだ後で往けるのかとか、様々な疑問を生じている。それに対して、親鸞がどういう答え方をしたかという、至心に信仰して名号を称えた時には、「正定」の位に就くと言っており、厳密に言うと、浄土に往ける、すぐに往けるとは言っていない。だから法然のように、実体としての<浄土>の存在を信じていない。名号を至心になって称えた時には「正定」の位に就けると考えている。「正定」の位とはどういうもの

かということについても、弟子たちに解説しているが、親鸞は比喩で解説しており、その比喩によれば、「正定」の位というのは天子に対する皇太子みたいなものだと言っている。つまり、浄土へ往けるということは決まっている、わかりきっているが、それは浄土そのものではなくて、浄土へすぐ往ける場所、つまりすぐ次に帝王になれるという皇太子がいるのと同じ場所、そんな場所のところだという言い方をしている。それは浄土を見通せる、そういう場所だと親鸞は考えたわけだ。

吉本にとっての課題は親鸞のその考え方を、わかりやすく、今の言葉で言ったらどうなるかということだ。たぶんそれは実体的な実際の死と、実際の生のちょうど中間のところに往けるところである、と言っていることになる。それはじきに浄土へ往けるところだが、浄土そのものではない。言い換えれば、浄土そのものが実体としてある、とすることはできないということだ。それからまた死後の世界もある、とすることがなかなかできないということの意味していると思う。そのちょうど中間のところに往ける、そしてそれはすぐにも浄土へ往ける場所だということを言っているわけだ。

吉本は、この考え方が、法然に比べて進歩したというのをおかしいと考えており、それは法然の考えを一步進めた言い方だと思っている。つまり、実体として浄土というところはある、と言ってしまうと嘘っぽくなってしまふからだ。現代人であるわれわれにも嘘っぽく思えるが、当時の人でも、そこまで言ってしまうと、それを文字どおり信じる人もいたかもしれないが、嘘っぽく感じる人もいたにちがいない。だから親鸞の場合には、そうは言っていない。浄土にすぐ往けるが、浄土そのものとは違うところだ、それは「正定」の位だということになる。そういうふうに吉本は親鸞の言い方を理解している。

吉本が仏教的なことを色々と考えたりする思想的な営みの中で基本にあるのは <善悪>の問題だと思う。仏教における <善悪>の問題の研究においては親鸞だけではなく、道元、日蓮、良寛の<善悪>観も取り上げている。

親鸞の<善悪>観は「歎異抄」の中によく出ている。吉本は人間が人間社会の中で判断する <善> と <悪> は相対的なものにすぎないので、本当の<善悪>はもう少し規模の大きいものだと考えている。その大きい規模の<善悪>からみれば、人間の判断する <善> と <悪> は規模の小さいものにすぎない。善行をするならば浄土へ往けるとか、悪行をするならば浄土へ往けないとか、そういうことはそれほど問題にならないという考えが親鸞によって初めて表された。親鸞は逆説的な言い方で、悪人の方が正機だ、往生しやすい、善の人に

は、自分で善いことをしようとか、あるいは善いことをしているというような考え方が出てくるから、浄土真宗の考え方からは、たいへんな回り道であると述べている。つまり、源信とか法然とか、浄土教の系譜の祖師たちが、どんなところで念仏を考えたかたどってみると、みんな念仏第一義ということ強く打ち出している。ただ、念仏以外の行、余行というものに対して、それは<悪>だというふうに本格的な意味で言っているのは親鸞が初めてだと吉本は主張している。教義的ニュアンスとしては、源信も法然にもあるが、本当の意味で余行は<悪>で妨げだと言いつつ切っているのは親鸞だけだ。

法然の言い方では念仏が<善>だという考え方が、そして余行は決して第一義にならないという観点が出てくる。知識がある者、見聞がある者はよくて、見聞がない者は駄目というのは不平等で、そういうことを考えれば、念仏は一番善い行いだ、余行はそれに比べれば劣るものだという観点が比較論から出てくる。親鸞は余行をやれば化土にしか再生できないということをはっきり言い切っている。そこが親鸞の倫理と言うか、<善悪> 観の根拠をなしていると吉本は指摘している。普通ならば <善悪> を考える場合に、善にも悪にも <大型> と <小型> があるというふうの一つの系列がある。親鸞の場合には、そうではなくて、善というの是一种の <唯一善> になって、残りは全部悪に転化するといふくい、そこは徹底的になっている。吉本の理解の趣旨は現実にはそんなことはありえないということだ。現実的には大善もあれば中善もあり、小善もあるというふうになるわけで、悪も、だれがみても大悪であるというのから、小さい悪であるという、そういう意味の倫理的な秩序は避けがたいところだ。親鸞は、そこは徹底的で善は一つだけある、その善には大善も小善もない。ただ善があるだけで、その他のことは全部悪ということになるわけだ。そうすると、現実的な <善悪> と <倫理> に対しては、いつでも親鸞は逆説的になっていく。吉本はその逆説的になっていくところが親鸞の <善悪> 観の射程が一番長いところだと思っている。

この射程の長さというのは、道元にも言えることで、道元も突き詰めて言ってしまうと、眠ることもいらぬし、食べることもいらぬし、ひたすら座っていればいいのだと最終的には言い切ってしまうところがある。現実の人間の振舞いからはほとんど不可能に近いことになる。それは逆説としてのみ可能になる。ひたすら座ればいいのだ、それが一番仏に近いのだ、後のことは全部しなくても本当はいい。人間が実際に行う振舞いは逆説としてしかそれと合致していかない。そうすると、現世に生きる意味は道元にとっては何もないという結論を吉本は出している。親鸞の場合も、少なくとも倫理的な意味での

<善>は何もいない。これは聖道の慈悲と浄土の慈悲との違いだ。聖道の慈悲は、<善>には、大善あり中善あり小善ありということで、人に対する憐れみにも、たくさんの段階があるという考え方になる。親鸞は浄土の慈悲だけが本当の慈悲なので、現世的な<善>と<倫理>はあまり問題にならないと述べている。

この二人に比べれば、日蓮は、自分を捨てて、菩薩と化して、利他的に衆生を救済するために粉になってしまうということが<善>の極致だと言い切っている。吉本はこれが現世的な意味ではとてもわかりがいいし、また現世的な意味の<善>にはいつでも合致する要素が日蓮にあるのであまり面白くないと思っている。でも日蓮の場合には、別な意味の逆説が必ず起こってくる。人間は、どうして自分を粉にしてまで利他的な行為に化することができるのか、どうして人間は生きながら菩薩たることができるのか、そんなことは不可能だという逆説から引き戻される。倫理は相対化の作用をいつも受けている。自分の中で、絶対的な<善>と相対的な<善>との間がいつでも測られていないと、<善>は虚偽に転化してしまう。親鸞と道元にはそれがないから、吉本はこの二人の方が高く評価している。

道元の系譜を引いた良寛も、現世ですることは本当は何もないし、また、現世で善いことをする役割は何もないと考えている。良寛の伝記をみても、彼は実際に善いことはしていなかった。村の人の役に立つような、例えば、川や橋などを修理したとか、道を造ったとか、そういうことは少なくとも良寛の行動の中には一つもない。良寛が現世的な意味で<善>を行ったと思えるのは子供と遊んだということぐらいしかない。そのような振舞いを吉本は解釈している。なぜ子供と遊んだのか。大人と関わったら<善>を行うか<悪>を行うか、必ず有効性と関わってくるからだ。しかし子供と遊んでも現実的な意味では<善>でもないし<悪>にもならない。だからこそ、それは<善>だ。もし大人と付き合っ、大人の村人のために善いことをしようと良寛が考えたら、それは現世的な<善>になる。良寛の修練した道元系統の考え方からすれば、それは外れたことになる。そういう意味の<善>の振舞いをしたら曹洞禅の基本に背く。そんなふう振舞ったら自分の教義は無に帰してしまう。

吉本は仏教における問題の中で、<浄土>の観念と<善悪>観の二つを徹底的にや追究したと思う。

2.キリスト教の倫理

吉本隆明が初めて聖書を読み、キリスト教を問題にするようになった事情は敗戦とその直後の状況によるところが大きい。太宰治の作品は戦争中から読んでいたというが、そこに描かれた聖書の問題が吉本自身のものとなったのは戦後である。

吉本隆明は太平洋戦争の期間を一種の愛国青年として過ごしている。彼にとって敗戦は非常な衝撃であった。彼の回想によると、勤労働員先の魚津の工場で天皇の放送を聞いて、すぐ茫然として寮へ帰ったらしい。何かしらぬが独りで泣いていると、寮のおばさんが「どうしたのかえ、喧嘩でもしたんか」と聞いたという。動員先から帰る列車のなかで毛布や食料を山のように背負った兵士を見て、「このつきおとされた汚辱感の中で、戦後が始まった。」と感じたという。

その時、戦争中に受けた教養が意味を失った気がした。戦争中に読んだ仏教書―「歎異抄」、「正法眼蔵」、「道元禅師語録」―は新しい現実に対応できなかった。精神的な混雑を初めて体験した吉本はキリスト教に向かった。富士見坂の教会に行き、牧師の説教を聞いたりしたことがあった。しかし、その牧師が教えた「新約書」の解釈は吉本自身の理解と全然違っていった。「新約書」はそんなに簡単ではないし、そんなに絶対的な価値はないし、という抗議を心の中で何度もあげた。教会通いをすぐあきらめた。敗戦による挫折から、なんらかの救済を求めて教会へも行って見たが、自己の聖書理解を超えるものを他者から得ることはできなかった。しかし、聖書に対する関心は消えなかった。そこから独自の聖書観を生み出すきっかけになった。

吉本は「新約書」を理解した日本の文学作品としては、太宰治の「駈込み訴へ」が、最上のものだと考えている。現代文学の中で、「新約書」の世界に真正面からぶつかった文学者はすぐに二人数えられるという。一人は芥川龍之介、もう一人は太宰治である。芥川龍之介の福音書理解は「西方の人」と、死ぬ間際に書かれた「続西方の人」に表れている。太宰治の理解の仕方は「駈込み訴へ」という短編によく表れている。

芥川の理解が示されていることは福音書の主人公に何を感じるかということだ。一つは「新約書」の主人公に含まれている心理的な柔軟性、優しさだ。もう一つは、「新約書」の主人公に表現されている一つの倫理的な傾向というようなものだ。その倫理、思想というものは、平凡な人に自分の理解の届かぬところ、わからないというような世界にある。「新約書」の主人公が当時の犯人バラバと一緒に十字架にかけられ、群衆に向かって、ローマ帝国の役人が、どちらを助け、どちらを処刑するかと尋ねた時に群衆が「泥棒の方

を助けろ」と答えた。なぜ「泥棒の方を助けろ」と言ったかということ、泥棒の心は群衆にとって自分の心の一部分を拡大していけば理解できることであった。しかし、福音書の主人公のもっている倫理性、思想性というものは群衆にもわからないし、ローマ的秩序にとってもわからない。二重のわからなさのなかで殺される場所に表れるキリストの倫理が芥川をとらえた。群衆の心の世界を拡大した時に得られる倫理の世界、善悪の基準の世界は、現世的に理解せられるもので、善と悪は非常にわかりやすい問題であるが、福音書の主人公の提出した倫理というものは全くそういう意味では架空の世界に属するわけで、つまり架空の世界に属するという事の中に福音書の主人公のもっている大きな意味があるのだ。芥川はそういう倫理的な意味の理解をしている。

それに対して、太宰治の場合には、キリスト教の問題が倫理の問題として出てこないで愛の問題として出てくる。つまり、太宰治における聖書の問題というのは、善悪二元論ではなく「愛という単一神」を目指しながら、現実にはイエスとユダという矛盾対立に苦しむという形で表れているという説である。ユダの裏切りの背後にイエスへの愛情を見るというのは、まさしく太宰治の独創的発見であろう。太宰の描く愛と憎は相反するものではなく、いわゆる「可愛さあまって……」という性質が強い。愛情はたえず憎悪に転化しつつあるもの、むしろ愛情の中にのみ憎悪があり、憎悪の中にのみ愛情があるというような形で見出されるものだ。太宰のとらえた愛情のこのような構造は、愛情だけにとどまるものではない。むしろ太宰の倫理の構造そのものが、そういう弁証法的性格を帯びる。

太宰は人間の感情というものが矛盾に満ちた、細分化できないものであることをよく知っていた。どこまでが愛でどこからが憎しみかというような線引きは不可能なのだ。ユダがイエスの愛を最後まで理解できなかったことを示している。ユダの愛が神の愛から遠かったからこそ、様々な感情が付随するのである。憧れ、劣等感、エゴイズム、恨み、そうした様々に変転する情念を、太宰はそのままに描き出すことに成功している。

ユダの永続の裏切り者というようなところを視点にして、福音書の世界をひっくり返すそのような仕方が、吉本は興味深いと考えている。しかし、吉本自身にとって福音書における切実な問題は芥川や太宰と少し違う。吉本にとって大きな問題は福音書の倫理が無限に人間の心理とか精神に浸透していくように見えたということである。新約書の解釈では、古いユダヤ教の倫理的規則をもっと拡大したという課題である。例えば、人を殺すなというユダヤ教の律法が、福音書の解釈では、人を殺すなというだけでは全く足りないの、そういう倫理観を拡大して、兄弟と争ったり、兄弟を恨んだりすることも、いけな

いことだというように拡大される。すべてのユダヤ教の十戒は厳しく拡大される。

人を殺すなという倫理というものは、一面では社会倫理となれるし、また一面では個人倫理となりうるわけだ。しかし、福音書の解釈のように、それで足りないということで、「兄弟と戦ってはいけない、兄弟に怒ってはいけない」というところまで拡大していくとすれば、それはほとんど社会倫理としては通用しないことになる。全然実践的な意味がないし、現実的な場面では社会倫理として矛盾にさらされるということだ。そうなると、全く個人の内面としてしか通用しない。だから、架空の福音書の倫理性はどんどん人間の内面に浸透していくわけだ。

実践的な倫理は、お前の敵はお前の家族だというような形で福音書に表現されていることがある。そういう倫理にとって最大の敵と考えられている家族、家族的な秩序は、反抗的な実践に対してはいつも敵対関係にある。実際に積極的な活動をし、秩序から迫害された現実体験をもっていないとすれば、決してそういうことは出てこない。原始キリスト教が現実の活動の中での秩序からの迫害というようなものにどうやって立ち向かうのかという問題に対して教祖は非常によく考えている。

吉本が考え抜いた問題は福音書の倫理はどこで有効性の限界をさらすのかということだ。福音書の主人公はパリサイ人と学者が神の子を迫害しているから絶対的に悪いことをしていると訴えた。しかし、学者とパリサイ人の側にたって、裏返して福音書の倫理観を見た場合にどうなるかということだ。学者とパリサイ人の側からすれば、福音書の主人公は神の子ではなくてただの秩序に反抗する暴徒にすぎない。暴徒を迫害して罰するのになにも罪はない。こういうところで福音書の倫理の限界を見つけた。つまり、福音書は自分の立場をとった倫理しか提出していない。もし異なった立場をとるならば、福音書の倫理は全く逆に理解される。福音書の主人公の立場から社会に反抗する倫理は非常に必然的でもあり当然でもある。しかし、別の立場からすると、そういう倫理自体が善とは見えなくて、ただの暴動であり破壊であるというふうにしかならぬという倫理的な立場もありえる。人間のもっている倫理性というものの基本的な決定をなすもの、立場そのものではない。立場は何が正当であり、何が不当であるというような絶対的な基準を決定できない。そこで決定されるのは相対的な決定だ。

吉本が独創的に打ち出した観念によって、絶対的な倫理の基準は人間と人間との関係の絶対性から出てくる。人間と人間との関係の本質を決定しているものは、決して倫理でもなければ、立場でもなく、もっと客観的なものである。その客観性に倫理思想は到達でき

ず同じ次元に属さない。倫理というものはいずれも相対性にさらされるということが出来る。

限界にさらされざるをえないということは福音書の世界自体にも倫理的矛盾を生み出している。隣人を愛するだけでなく、敵も愛さなくてはならないという戒律があるが、学者、パリサイ人に対する極端な憎悪の言葉がすぐに飛び出してくる。そういう矛盾自体がどこから起こるかといえば、それはおそらく福音書が表現しているある立場における倫理の限界からきているにちがいない。

次には吉本はキリスト教が世界宗教になった理由をどこにおくかという問題を提起している。世界宗教になるために必要な普遍性を獲得していく基盤が福音書の倫理的性格のなかにあるわけだ。つまり、福音書の倫理は社会倫理としての性格をどんどん捨ててゆく、その代わりに人間の内面を支配する倫理という意味でどこまでも浸透してゆく。そういう過程は原始キリスト教に世界性を与えた基盤であったということができる。福音書の世界がもっている条件は、常に福音書自体が表現している倫理性、倫理的な世界というものにかかっている。それ以外の要素は、例えば伝記的な要素としても、また神話的な要素としても完全にその条件をもっていない。ただ倫理の表現された世界という意味では極めてラディカルでもあるし、また本質的でもあるから、そういう絶対的な存在の仕方が福音書のもっている存在価値の根本問題である。その倫理的な世界が実践的な倫理というものに裏打ちされている。実践的な体験なしにはこういうことは決して言えないという意味での鋭い倫理の指摘が、福音書の倫理的な世界を根拠づけ、またリアリティーを与えているというふうに考えることができる。例えば、福音書の主人公が故郷へ帰るところの描写は文学的にも非常にリアリティーをもっている。主人公が故郷に帰って伝道すると集まってくる群衆が主人公の家族のこともよく知っているし、また主人公自体をも知っているのだから、伝道しても少しも効果が表れない。福音書の主人公はたくさんの奇跡を群衆に見せたいが、奇跡を起こすことができない。思想が説得力をもつのはどういう条件によるかというのと、その思想を受け取る側にとって遠くにあるというふうに見えることが大きい条件なのである。思想は、それが生み出された基盤が自分よりかなり大きく離れているところにあるというふうに見える時にだけ、説得力と影響力を持ちうるわけだ。そういう普遍的な規則が福音書の挿話の中ではかなりのリアリティーをもって表現されている。

吉本はそういうリアリティーを福音書の倫理的な世界に与えている福音書の著者を大き

な意味の思想家として評価している。現代でも依然として福音書のもっている倫理的世界が一定の意味合いをもっていると考えられる。福音書の提出している問題は現代の世界において一つの大きな思想的な課題としてまだ存在しており、まだ解決されていない。その問題の核心は福音書の倫理的世界の向こう側にある世界だ。倫理が届かないとすれば何がその世界を律するかという問題だ。吉本に従えば共同性の世界を根本的に律するものは倫理ではなくて関係の絶対性ということだ。人間の共同性関係の中で存在する仕方は倫理がもちえない客観性だ。人間が倫理的なものによって規定されていないと吉本は指摘しているので福音書の考え方を肯定できない。しかし意見の違いにもかかわらず、福音書の倫理的な観念が世界の思想に大きな影響を与えたことを肯定している。

3. 天皇制について

旧憲法には、「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」という規定がある。それは、吉本の幼い時代には子供の時から学校制度の中で教えられ、また、普通の庶民の家庭の周辺に雰囲気としてあったわけだ。だから、文字どおり、天皇は神聖にして侵すべからざる現人神であるという育ち方をしてきた。ふだんの庶民の日常生活では、天皇を意識しなければ生活できないということはないわけだ。あまり日常生活には関係がなかった。しかし、絶大な、神聖な存在だというふうに別の意味では非日常的な雲の上あたりの存在だと思われていた。つまり、天皇制は東洋の専制君主のあり方を象徴しているわけで、そういう二重性が文字どおり受け入れられたところで吉本は育ってきた。

そして、天皇がきわどく日常の意識に入ってくるようになったのが、戦争だ。つまり戦争になって、「神聖ニシテ侵スヘカラス」という天皇の憲法規定がもっている意味は、政治的な意味をもったり、軍事的な意味をもってくる。また日常生活にも影を落としてくる。旧憲法の規定では、天皇が統帥権をもっている。陸海軍を内閣の閣議を経ないで直接動かせる憲法規定になっている。だから、軍事的な意味や、政治的な組織勢力が前面に出てくる。「神聖ニシテ侵スヘカラス」によって、普段の日常生活ではあまり関係がなく、意識に入っていないはず、の天皇がきわどく日常的に意識に入ってくるようになった。それが戦争中を貫いた考え方だと吉本は考えている。

自分個人の戦死と、天皇の存在と、ぎりぎりのところで取り換えるというふうになってきた時に、吉本が一番惹かれたのは、「神様としての天皇」だ。そういうイデオロギーが一番いいような気がしたのだ。

外に、祖国のためだとか、同胞のためだとか、家族とか友人のために死んでもいいとか、いろいろな言い方があるが、それらには全部有効性の問題が入ってくるようで、どうも納得できないというのが、若い吉本の考えだった。ところが、天皇のためにという考え方が、一番有効性が入っていない、ものすごく純粋なもののような気がしたと吉本は述べている。

天皇が現人神だと考えるのは、一種の東洋的な宗教だと思う。この現人神は東洋的なディスポティズムの一つの形態だ。中国の皇帝的なものもそうだ。それは一種の民族宗教でもあるし、種族宗教でもあるわけだ。しかも東洋的なディスポティズム、専制君主のあり方の一つだと思う。つまり、「神聖天皇」ということだと思う。三島由紀夫の、「人間天皇」と言われるようになった、天皇が人間だというのはおかしいという考え方を吉本自身も肯定している。「人間天皇」だと、なにかと取り換えているという感じになる。「象徴天皇」も、大した意味はない。でも「現人神」であつたら、東洋的専制君主のあり方の一つとして、世界的な意味がある。

戦後の民主主義がいう「象徴天皇」というのを吉本は肯定できない。これは全部否定すべきだというのが、吉本の意見である。進歩的な人たちが「象徴天皇と民主主義」というが、吉本は納得しない。つまり、そんなところでとどまっていたら、天皇制は絶対に分からない。外のことではどんなに知的な存在であっても、天皇が現人神だという観点とは同居できるものだ。それは宗教だからだ。

吉本に現在で天皇制の命運が尽きているという言い方の中にはたいへんな安直さが含まれているのである。なぜならば、宗教組織としての天皇制の側面が無視されてしまうからだ。政治権力としての天皇制があまり重要ではないという吉本の意見は当然だと思う。日本の歴史を考えてみて、天皇がじかに政治的権力を掌握し行政的にも手腕を発揮したというような事例は数えるほどしかない。大部分は間接的に、つまり一種の宗教性として、あるいは宗教的な司祭とか神主として存在してきたのである。直接政治権力を掌握してなくても、単なる神主にすぎなくても、存続してきた。天皇制の根本は政治権力ではなくて宗教性だというような考え方がわかるようになった。

吉本はもう一つの天皇制の存続の理由が天皇制にまつわるタブーだと指摘している。このタブーは現在の日本社会の中にまだ存在するにちがいない。タブーが存在する限り、天皇制は本質的な意味ではなくならずその特別な力を失わないということが確かだ。

天皇制が宗教的な力として持っている権力構造の起源を探している吉本は日本の古い民俗宗教に向かっている。天皇制における宗教性の一つの軸は、どこか外からきた神、あるいは海の彼方からきた神というものに対する信仰である。その<外来神>あるいは<海来神>は、他の所から来た、どの方角からかは昔の人には分からなかったが、ともかく海の向こうから神がやって来た、あるいは自分たちの祖先がやって来たという意味の信仰が一つの基本になった。

吉本はこの軸と関わった問題としては言語学に近い問題を追究している。天皇には「天」という字をあててあるが、その「上の方」という観念は、本当は単に「上の方」という意味ではなく、むしろ「海」という字をあてた方がいいというのが吉本の仮説だ。海の向こうに神がいて、あるいは神の領土があって、そこからやって来たという意味の「海来神」信仰がある。「天」という字は元来人間よりも高い所にいるものという意味で、そういう字があててあるが、それは空間的に言って向こうから来た、海の向こうには極楽みたいな所がある、そういう宗教構造の表れと理解した方がいいと吉本は主張している。要するに「天」という字よりも「海」という字をあてた方がいいほどに、それが天皇制のもっている宗教的な側面の一つの重要な軸をなしていると思われるのである。

それからもう一つの軸は、一種の祖先拝が宗教としての天皇制に行き着くというような宗教的な軸がある。この二番目の軸についての論理には吉本は空間と時間の問題を提起している。つまり、その軸は一見時間的な構造だが、本来的に言えば天皇制以前に存在した国家とかあるいは部落とか、そういうものの祖先拝に行き着くわけで、時間性とみえるものが本来的には空間的なもので、土地とか風土とかそういうものに結びついた信仰観念だと吉本は指摘している。それを言わば時間性として遡っていくと、どこかに本当は接目があるはずだが、接目が消されているから宗教としての天皇に行き着いてしまう。時間を遡っていくと、原理的なものを見つけることができるが、しかし本来的に言えば、それは空間的な土俗的な観念である。その土地に住まった者が部落のあるところに部落共同のお祭り場所を設けてそこを拝む、本来は土俗的という、空間的な観念である。しかし法的な体系あるいは宗教的な体系としてそれらの接目がなくなっているから、辿って行けば天皇制に吸収されてしまうというふうにかえって時間的な構造になっている。

天皇制の宗教的な側面をよく分析してみると、祖先拝の行き着く果ての天皇制、それから外来神信仰が行き着く果ての天皇制というようになっている。天皇制のもっている宗教構造はその二つから成り立っていると思われる。外来神信仰と祖先拝が宗教性としての天

皇制の起源だというような結論は出されていた。

次には吉本は制度としての天皇制の問題を考えている。制度としての天皇制は農耕儀礼に基づいているところから日本の農業が大きく退潮している現在、天皇制も衰えていくというのである。しかし、なくならないかもしれない。他の制度—農業とか資本主義—が倒れても制度としての天皇制、つまり「日本国民統合の象徴」であると憲法に言われているものはなくなる。吉本によれば、残っていても形だけ残っているというかどうかということは現在の天皇制の本質的な問題だ。文明が発達しても天皇制は農耕国家の起源を保存している。東京は世界の大都市になってもその真ん中に架空の農耕社会の王国の象徴を保っている皇居の領域がある。天皇制は日本人の伝統意識とか儀式志向とか、そういうものの象徴として憲法上の象徴だけではないので、これからも残ると思う。

吉本が宗教の問題と取り組んでいる理由は吉本自身が現代の虚しさと不信に悩んでいるからだと考える。"(現代に一番深刻な問題は)われわれの中に<不信>があることだ。その<不信>は様々な形をとる。例えばセックスに向かったり、芸術に向かったり、文学に向かったり、あるいはそれこそ宗教に向かったりするかもしれない。"吉本はそのような告白をしている："ぼくが本当にしていることは、なにがぼくの<むなしさ>と <不信>を解くのだろうかを考えることでもあります。"

吉本にとって現代の<不信>を超えられるのは宗教ではなくてヒューマニズムなのだ。

参考書:

日本仏教の諸問題 新稿 1983.9.27 「春秋」1983.12抄録

「増補 最後の親鸞」をめぐって 「春秋」1981.10

「最後の親鸞」のこと 「新刊ニュース」1976.11 2 「週間読書人」1976.11.29

マチウ書試論 「現代評論」1954.6.12

新約的世界の倫理について フェリス女学院大学における講演 1968.11.9

現代キリスト教思想の諸問題 新稿 1988.10.8

全天皇制・宗教論集成 春秋社 1988